

父を語る―父鋼典の思い出！（その三）

『唯一聞いた話とは』 五女神田直帆

父は自ら戦争について語ることはありませんでしたが、私には二つの思い出があります。一つ目は靖國神社へ連れて行ってもらったことです。高校1年の夏休み、父に靖國神社に連れて行ってほしいと頼んだところ、父は喜んでホテルを予約し、父娘の二人旅となりました。そ

の道中、父と何を話したか全く思い出せません。父は推理小説を数冊購入しずつと読んでいたように思います。靖國神社参拝の後、遊就館で様々な展示を見ていた時、ある機関銃の前で父は「これは俺が考案したんだ。落下傘部隊の降下作戦で、以前は人と銃を別々に落下させていたが、銃を組み立て方式に改良して人がそれを持って降下するようにしたんだ」と説明してくれました。さらに先へ進むと、何人かの兵隊さんが並んでいる一枚の写真が目にとまりました。父の部屋にある本の表紙の写真と同じだったからです。それは義烈空挺隊の方々の写真で、眼鏡の方は父と同期の隊長さんでこの部隊は全員戦死されたと父が話してくれました。

二つ目の思い出は、私が小学生の頃から父が続けていた超能力の研究についてです。時には電気屋さんに頼んで超能力を測定する機器を造ったり、学校が休みになるとESPカードを使った実験等に私達子供が駆り出されていました。ある時、父が毎日部屋の隅で瞑想を始めたので、「お父さん何やってんの？」と聞くと、「幽体離脱の訓練中だ」と。それは数カ月間続きました。「お父さん、なんで超能力の研究してるの。患者さんの病気を治したいの？」と尋ねると、父は「戦争のためにやっているんだ。武器で殺し合うような戦争はだめだ！ 幽体離

脱で敵陣に潜入し、相手の戦略を探ったり、念力で戦意を喪失させて争いを終結させるんだ」と言うのです。「お父さん、すごいね。それはいいね。それで幽体離脱はできたの？」と聞くと、「いや、まだだ」結局、幽体離脱はできなかったようです。当時の私は父が戦わずして敵を降伏させる方法の開発を目指していたと思っていました。本当は超能力で人間の憎しみや怒りをコントロールし、争いのない世界にしたかったのではないかと、今思います。

(市川雄一 22)